

第22回

住まいとコミュニティづくり活動助成事業

成果報告会（令和7年度（2025年度）助成） & まちづくりNPO交流の集い

開催報告



一般財団法人
ハウジングアンド
コミュニティ財団
Housing and Community Foundation

発行日：2026年10月



一般財団法人ハウジングアンドコミュニティ財団では、2025年度助成団体の成果報告を行い、各団体の活動内容をより詳しく知っていただき、相互理解と今後の活動発展に繋げるため、成果報告会&まちづくりNPO交流の集いを開催しました。

開催日：2026年7月18日（土）

会場：九段会館テラス 302「茜」・オンライン

参加者：2025年度助成団体、2026年度助成団体のみなさんと
コメンテーター

※本開催報告では、各団体の当日でた発言を主に掲載しています。成果報告書（HPにも掲載）にて活動内容と合わせてご覧いただければと思います。

contents

- 02-03 2025年度助成団体報告「住まい活動」
- 04 基調講話 卯月盛夫氏
- 05-07 2025年度助成団体報告「コミュニティ活動」
- 08 2026年度助成団体紹介・懇親会

コメンテーター

山岡 義典 氏（法政大学 名誉教授）
西村 幸夫 氏（東京大学 名誉教授）
木下 勇 氏（千葉大学 名誉教授）
中村 順子 氏（認定 NPO 法人コミュニティ・サポートセンター神戸 ファウンダー）
稲葉 佳子 氏（NPO法人かながわ外国人すまいサポートセンター 理事）
男鹿 芳則 氏（前（一財）世田谷トラストまちづくり理事長）
小場瀬 令二 氏（筑波大学 名誉教授／元練馬区みどりのまちづくりセンター長）
井本 佐保里 氏（東京大学 准教授）
梅宮 路子 氏（（公財）日本ナショナルトラスト事務局長）
山田 翔太 氏（（一財）世田谷トラストまちづくり地域共生まちづくり課）

開会挨拶



本日は会場とオンラインでご参加いただき、ありがとうございます。各地で課題の解決に挑む皆様の活動を聞き、情報を交換しながら、活動をよりよくするヒントを得ていただきたいと思います。互いにエールを交わすことも、この会の大切な趣旨です。講話、発表、ディスカッション、懇親会と長時間になりますが、率直な質問や意見を通して、実りある交流になることを願っています。

一般財団法人ハウジングアンドコミュニティ財団
専務理事 久田見 卓

住まい活動部門

すべての子どもが多様な人と出会い、遊べる空間づくり

鈴木 雄貴 氏／一般社団法人えんがお（栃木県大田原市）

助成で、障がいのある子ども地域の子も遊べる室内アスレチックを整備しました。設備投資の資金は普段なかなか用意できず、本当に助かりました。子どもがけがをすると、近くの高齢者が駆け寄って心配してくれます。一人でテレビに話しかけていた方も、見守りや掃除を頼られ、生きがいを感じるようになりました。地域サロンの利用料は1日100円ですが、みんなの家自体は赤字。それでも、施設の外の人と出会い、役割を持てる欠かせない場所です。

地域遺産を活用した子どもの居場所となる図書館づくり

樋口 祥一 氏／くらしょいるま（埼玉県入間市）

助成で醤油蔵の自習室や図書館づくり、運営体制の整備を進めました。中学校の定期テストの1週間前に学校から案内を配っています。本棚の作成時に出的かなくずを使うクリスマスリースづくりも、活動を知ってもらう機会になりました。

ただ、中心メンバー3人にはそれぞれ仕事などがあり、いつも開けられる状況ではありません。高校生にも利用を広げ、やりたい人が現れたら活動を支えたいです。

Q 小場瀬 令二 氏 | 蔵を使う価値を、子どもや地元の方はどう受け止めていますか。

A 「ずっと入ってみたかった」と訪れる方や、醤油を売っていた頃の思い出を語る方がいます。中で何をしているかはまだ知られていません。子どもは気に入り、何度も来てくれます。

「わたし」が安心して自分の形を発見し、視覚言語や身体感覚からなる表現文化を育み、共創の在り方を実験・実践できるホーム（ラボラトリー）をつくる

根本 和徳 氏・和田 夏実 氏／一般社団法人ooo（東京都台東区）

助成で安全なキッズスペースをつくり、親子の企画を動かしやすくなりました。痛みをどう伝えればよいか分からないろうの子どもとは、ろうの看護師と身体について学びました。各家庭にとどまっていた空間の工夫も、デフスペースの冊子にして共有できました。ヨーロッパから講演依頼にもつながっています。様々なことを同時に表現できる手話の特性を生かし、考えを深める場を大切にしながら、各地のろう者のコミュニティと連携したいです。

駅前屋台と縁側と庭でつなぐ多世代交流のまちづくり

森泉 由美子 氏／一般社団法人森と泉（神奈川県川崎市）

助成で障がいのある人の通所施設に縁台や掲示板、屋台を設け、通り過ぎる方と声をかけ合う交流が生まれました。町の祭りには商店街の方と準備から加わっています。一方、利用者と近所のお店との行き違いや、大きな声への苦情もありました。言葉で伝えるににくい方とも、チェックボックスや目を合わせる方法で対話を重ねています。その変化をSNSで伝えると応援者が増えました。ただ、互いの安心・安全には手厚い人員が必要です。協力者を増やし、地域へ開く活動を続けたいです。

地域で紡ぐ「ひと」と「モノ」の新たな循環

松本 有未 氏／NPO法人綴る（石川県金沢市）

助成では3つ目の拠点空き家の「角の家」を整え、カウンターにも椅子にもなる家具を設けました。道からふらっと入る方が増え、出会った人同士の企画や会員の自主活動が生まれています。

一方、拠点が増えると維持管理の手間と費用も増えます。会員は27人ですが、場所を使いたい方が多く、中心で事務を担う人はなかなか育ちません。遠方から会費で応援する方もいますが、改修費の返済と経費で余裕はなく、長く続く団体に工夫を聞きたいです。

若者と地域が共に育むコミュニティ工房を創ろう

伊藤 満広 氏／NPO法人かしもむら（岐阜県中津川市）

助成で老朽化した住宅展示場を、学生の手でコミュニティ工房に改修しました。お客様のようだった学生が、今は地域のパートナーです。解体材の再生や祭りのものづくりに取り組み、3人の若者が移住しました。

学生を支える体制の維持は、地域の課題です。

Q 綴る | 長年、活動を続けていくには？

A 完成させず、未完成のまま繰り返すことです。30年間同じことをするのでなく、新しい課題を学生と地域の人と一緒に悩み続ける関係が、続く理由だと思います。

（元学生）最初は木造建築の実習が目的でした。通ううちに会いたい人が増え、3、4年目は帰省の感覚に。「息子が帰ってきたみたいで嬉しいわ」と迎えられ、うれしかったです。

Q 木下 勇 氏 | 移住した学生は、地域を主体的に動かす力になりますか。

A 学生が自分たちで運営する体制をつくり、今は地域の方が助けられています。それを維持できるかは、地域に与えられた課題です。

「水場と居場所の創出」地域でつくる事前復興まちづくり

下田 元毅 氏／九鬼町「事前復興まちづくり委員会」（三重県尾鷲市）

助成で水場と避難する居場所を整備しました。昔の石組み水槽「ぼっち」に関心を持ってもらおうと、流しそうめんを開催。食べるそうめんには水道水を使い、山からの水路と分けました。お盆に開くと、帰省した孫、親、祖父母が集まり、子どももスタッフに。閉校した小学校の講堂で子どもと一泊し、必要な物や、町の人全員は寝られないことも確かめました。災害直後だけでなく、その後の生活の場も考え続けたいです。

空き家のポテンシャルを活用したコミュニティの構築

縄田 康一 氏／豊栄アップサイクルビレッジ協議会（広島県東広島市）

助成期間に4軒の空き家から廃材や家財を回収し、旧製材工場を保管拠点にしました。所有者と合意を確認し、資格を持つ業者と連携しています。一般の方や学生と改修し、マルシェでは古材販売や器を植木鉢にする体験も行いました。業者への調査では、解体の工期が短く、保管や加工に手間がかかることが分かりました。だからこそ拠点が必要だと感じますが、固定費とスタッフ確保は未解決。古材と技術で家を直したい人を支えたいです。

コメント

小場瀬 令二 氏 | 空き家を使う活動は心強いですが、善意を前提にするだけでなく、権利関係をきちんとしておいた方がよいと思います。

こどものチカラがまちを変える！

～ミュンヘンと高知の事例から～

早稲田大学名誉教授 卯月 盛夫 氏

私はドイツで、市民に理解してもらい、意見を聴きながらでなければ都市のデザインはできないと学びました。こどもの声を聴くことも、その先が大切です。意見を表明した後、自ら行動し、大人と一緒にまちをつくる。その仕組みを二つの事例から考えます。

ミュンヘン | 提案を、共同決定と実現へ

都市が発展するだけで、こどもや家族にやさしいまちになるわけではありません。自由に動き、遊び、集団の中で認められ、学べる環境をつくる。その背景のもと、NPOが学校や児童館に出向き、民主主義やこどもの権利、共同決定を学ぶ授業を行い、提案を支えています。

9～16歳が参加できるこども・青少年フォーラムは年2回、市議会議場で開きます。議員から厳しい質問が出て、司会がこどもの側に立って応援します。参加したこどもたちの過半数で採択し、市議や市職員の担当をその場で決定。原則6か月以内の実現を目指し、難しいときも次回に理由を説明します。提案を預かった大人が、何度も打ち合わせをして応答する仕組みです。

廃止が決定した地域図書館を残してほしいという提案では、中央図書館まで遠すぎるということこどもの声を受け、2年半の議論を経て存続が決まりました。横断歩道の青信号を長くする要望はかなわなくても、右左折車用の点滅信号を追加しました。できないで終わらず、現場を確かめ、一緒に別の解決を探す姿勢が重要です。

高知 | こどもが審査し、まちで実践する

2012年に始まった「こうちこどもファンド」は、こどもの提案を、小・中・高校生各3人、計9人のこども審査員が審査します。審査基準も自分たちで考え、公開審査で議論します。助成の上限は20万円、お金の管理は大人が支えます。小さく始めることもできます。市民や企業からの寄付が助成総額を上回る広がりも生まれています。

高校生の落書き消しには、商店街のねぎらいや地元メディアの取材が重なり、まち全体に活動が広がりました。畑仕事の取組は、初年の失敗を経て収穫し、高齢者への野菜の配達や会食会へ。4歳から90歳までが集う多世代交流になりました。久重地域では、自然の魅力を学んだこどもたちが大人の議論に加わり、地域連携協議会に若者部会ができました。

活動したこどもや審査員には、高知が好きになった、まちで大人に挨拶されるようになったという変化もあります。住み続けるかどうかは分かりませんが、まちを好きになることが一つの要因になると思います。

主体的な参加が生む変化

2020年の子ども審査員経験者への調査では、50人に尋ねて16人が回答しました。『まちのために役立ちたい』は、5点満点で活動前の平均3.38から活動後4.75へ上がりました。まちづくりを面白いと感じ、大人の知り合いが増えたという変化もありました。

こどもを参加の「おまけ」にせず、提案し、行動する担い手として迎えたい。こどもの活動は家族、自治会、商店街を巻き込み、多世代の参加と交流を促し、まちを変えます。



ミュンヘン | 市議会議場のフォーラム



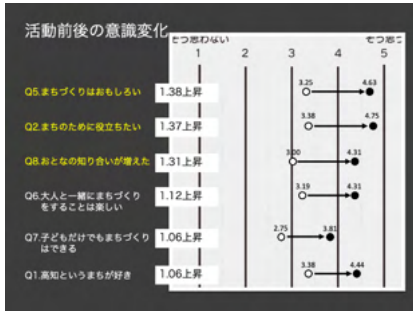
ミュンヘン | 提案の実現に協力する



高知 | こうちこどもファンドの仕組み



高知 | 高校生による落書き消し



高知 | 活動前後の意識変化

2025年度助成団体活動報告

コミュニティ活動部門



多世代でつながる地域共生型フリースクール

高橋 智美 氏 / 一般社団法人ユアセル（北海道札幌市）

高齢者共同住宅を拠点に、助成を受けてフリースクールと多世代交流を進めました。畑を子どもや若者と耕し、子ども食堂では学生が料理を担当。餅つきの準備が分からず、町内会の方に教わりました。地域や行政とのつながりが広がった1年です。公共施設は参加費を取ると利用料が上がるなど負担もあり、今は活動の一つの家に集め、誰もが小さな挑戦をできる私設公民館づくりを進めています。

Q 学生ボランティアが参加するきっかけや、モチベーションは何でしょうか。

A 就職に役立つから来るのかなと思っていましたが、実際は社会に役立ちたい、高齢者や子どもと関わりたいという学生が多いです。大学のサークルではなく、別の居場所がほしい人もいます。同世代より少し上の20代、30代と関わりたい子も多いですね。



家庭菜園で多世代交流と生きがいくくり

岩本 希 氏 / NPO法人恩おくり（北海道江別市）

助成で大学生と高齢者の家庭菜園を手伝い、お裾分けの野菜を商店街の0円マーケットに並べました。大人のスタッフも同行します。お茶を飲んで話すだけより、一緒に手を動かす方が自然に交流でき、作業後にお宅で長くおしゃべりすることもありました。

困ったのは、学生と高齢者の都合が合わないこと。頼むのは申し訳ないと、草が伸び切ってから呼ばれることもあり。短い間隔で定期的に通えばよかったと思います。畑以外の困りごとも見え、今年度は小さなまちのサポート事業へ広がっています。

Q 学生ボランティアが参加するきっかけや、モチベーションは何でしょうか。

A 大学で教えていた頃の学生が、卒業後も来てくれます。10代から70代まで関わる中で、居場所もキーワードです。「あなたにしかできないことだからお願いね」と、一人ひとりの可能性を見つけ、その人だからできる役割を持ってもらうことを大切にしています。



温かな愛に包まれる心のふるさと

佐藤 浩也 氏 / 網地島ふるさと楽好（宮城県石巻市）

助成を受けたふるさと楽好では、海遊びや釣り、竹とんぼづくりを島の人の得意なことで結びつけています。役員5人だけで迎えるのではなく、海女さんや竹とんぼの名人にも協力してもらいます。長く教えてくださった方が亡くなり、奥様に感謝状をお渡しすることもありました。震災後、子どもの励ましの手紙を見て、島の人は翌夏も迎えたいと片付けを進めました。子どもの力は大きいと感じます。

今後は活動を入口に移住する人も増やしたく、募集に2人が応募。まず島の人と仲良くなり、少しずつなじんでもらいたいです。



子ども食堂を始まりに、困難を抱える子供と家庭の支援

根本 幸子 氏 / NPO法人あっとホームたかまつ（茨城県鹿嶋市）

助成で食事や体験活動、安心して過ごせる学習スペースを整えました。一人っ子の高校生の、いろいろな子がいて楽しいという言葉がうれしく、運動会企画も実現しました。

ただ、困難を抱える子への支援を前面に出すと、ほかの子が参加しにくい。そこで誰が来てもよい夏祭りを開きました。助成の申請自体も、頭の中を整理し、活動をどう良くするか考える機会になりました。

Q 稲葉 佳子 氏 | 来てもらいたい子どもや地域の方に、参加してもらう工夫は？

A 一回の活動だけでなく、日々を大事にしています。地域に入るのは難しく、回覧板に載せてもらうことも高いハードルでした。近所を回って案内し、顔を合わせて分かってもらう。そのような関わりから進めています。



坂と階段の郊外住宅地で住み続けるための地域交通

木村 真理子 氏 / NPO法人玉川学園地区まちづくりの会（東京都町田市）

助成でスタッフ用ピブスや利用券、予約・運行を共有する管理システムを整えました。Googleカレンダーやフォームを使い、運営の負担を減らしています。初回はコーディネーターが自宅を訪ね、家族や体の状況を聞く流れです。

ただ、送迎や付き添いの進め方をめぐり行政との調整が続いています。顔の見える関係で小さく始める計画でしたが、今月また指摘があり、市の庁内検討の返答待ちです。タクシーや徒歩の付き添いも含め、実施方法を協議しています。



互いにエンパワーメントしあえる多機能型複合施設事業

四浦 麻希 氏 / 一般社団法人Life is（東京都多摩市）

助成で団地商店街の空き店舗に図書室とセレクトショップを整備しました。完成前から開き、どんな場にしたいかを一緒に考えました。関わった方が自分の場所として声をかけてくれます。つくりたいのは、日常の中で福祉と出会う入口です。2階で入りにくいため、1階への機能拡大を検討中です。それぞれの関わり方を大切にしたいです。

Q 山田 翔太 氏 | 地域の日常との接し方の工夫は？

A 駄菓子屋を併設した施設では、小学生が利用者さんの横を通して2階へ行きます。「名前なんていうの？」と、互いに名前を呼び合う関係が生まれました。今の拠点もガラス張り、通りすがりの子どもにも手を振ると振り返してくれる。自然に会話ができる接点をつくっています。

Q 木下 勇 氏 | 「関われる余白」「未完成」素敵言葉は、どこから？

A 代表が言葉を大事にする人です。着工が遅れた時も、逆手に取って「未完成を楽しもう」と発想を転換しました。出す言葉はチームで確認し、共通言語を持っています。



竹林がつなぐ地域循環型多世代コミュニティの創出

柏木 由美子 氏 / スパイスアップSOZai循環Lab（神奈川県横浜市）

助成を受け、竹フェスや学校の講座、竹のものづくりに取り組みました。失敗を怖がる子も、竹は一本ずつ違うし、駄目なら作り直せばよいと伝えるうちに、イベントの題字を書き、運営に加わるようになりました。学校には材料を届け続けるだけでなく、近所の竹林とつながってほしいと伝えています。恵まれたまちでも困りごとは潜んでいます。

一方、育った人が別の活動へ進むため中心メンバーの確保が課題です。自分たちも楽しみ、地域に関心を持つ人を増やしたいです。



乙女高原で育む自然と人の架け橋・乙女高原案内人

植原 彰 氏 / 乙女高原ファンクラブ（山梨県山梨市）

助成で3日間の乙女高原案内人養成講座を開きました。講義と野外実習、ワークショップを組み合わせ、修了した人が案内や自然学習、調査・保全に加わる入口です。ただ守ろうと呼びかけるだけでは、担う人は増えません。新しい案内人にチョウに詳しい方がいて、パンフレットの準備も始まりました。身近な仲間だけでは守り切れず、事務局や資金、発信力の強化が課題です。研修や自主企画を支え、助成でついた弾みを生かして細く長く続けたいです。



みん営公民館のコミュニティの成長・連携・挑戦事業

長砂 伸也 氏 / 石部豆講（滋賀県湖南市）

助成で放課後自習室や本棚オーナー制に取り組みました。本棚は近所の家具職人に作ってもらい、利用料が運営を支えています。高齢者には頼まれた仕事でなく、自分たちのやりたいことをしてほしいと伝え、健康麻雀や地域の踊りを習う催しが生まれました。

一方、引っ越しや仕事でメンバーが離れ、電車での琵琶湖一周は実施できませんでした。継続する人をどう増やすか、場所を維持するための活動ばかりになっていないか。成長した人の卒業も受け止め、好奇心を原点に無理なく続ける方法を探したいです。



子育て支援を介したホテルと地域のコラボレーション

松田 舞 氏 / 一般社団法人みつくし（京都府京都市）

助成で月1回の子ども食堂と夏祭りを開き、ホテル併設のシェアハウスの親子が地域と出会う場をつくりました。地藏盆を復活させたかったのですが、町内会との調整で実現せず、夏祭りに。町内会には案内配布に協力してもらいました。祭りでは子どもがお手伝いで券をもらい、親にお金をねだらず遊べるよう工夫。入居する親がバルーンやケーキ作りの講師に、子どもは学校に掛け合ってボランティアを集める側に。支援を受けるだけでなく、自分にできることを地域で実践する姿が大きな成果でした。



団地（公的賃貸住宅）の自走型自治型モデルをつくる

池田 淳 氏 / NPO法人団地ライフラボat茶山台（大阪府堺市）

助成で3種類の情報を「茶山台新聞」にまとめ、全戸に配る仕組みをつくりました。ごみの日と各拠点の予定をカレンダーにし、冷蔵庫などに貼って見てもらいます。別の拠点へ誘い合う動きや、専門機関とのつながりも生まれました。電動カートも毎週試し、住民が運転手や指導役を担う体制を整えました。助成でドライブレコーダーなどを備え、4月から本格運行。

ただ、交通量の多い駅前にはまだ入れません。持続可能な運営体制と、助けてほしいと言い出せない人にも届く支援が課題です。

コメント

● 男鹿 芳則 氏 | 居場所をつくっても、公共交通が衰退すると、そこに行きたいのに足がなくて孤立してしまいます。場所とともに、移動の足をどう確保するかが重要です。

● 山田 翔太 氏 | 鍵は対話と日常です。一人でいる高齢者を「おしゃべりしましょう」と引っ張り出しても、知らない人と話したいとは限りません。輪に入らず、横で会話を感じながら一人で過ごせる。そんな当たり前の風景に、どう変えていけるでしょうか。

● 木下 勇 氏 | 自分たちで完璧に完成させず、「ここが足りないから手伝ってほしい」と助けを求める。子どもにも活躍の場ができ、想像以上の力を発揮します。



2026年度助成団体紹介

わがままパーク（群馬県みどり市）

私たちは空き家を使い、子どもと遊び場をつくっています。子どものアイデアに、建築やデザインを学ぶ学生の力を合わせます。意見を聞くだけで終わらず、形にしていきたいです。

NPO法人 I Love つづき（神奈川県横浜市）

世代を越えて集まれる畑づくりを進めています。ただ、日陰やトイレがなく、長く安心して活動しにくい状況です。助成を使い、集まるための環境を整えていきたいです。

NPO法人ぴあっと（神奈川県相模原市）

障がいのある子の家の中の危険は、外から見えにくい課題です。家庭を訪ね、困りごとと対策の工夫を集めます。建築や福祉の専門家と連携し、同じ悩みを持つ家族へ届けたいです。

ももくさ（愛知県岡崎市）

耕作放棄地だった畑を使い、作業やイベントを行っています。誰もが役割を持てる場を目指していますが、地面のでこぼこなどが課題です。参加しやすい環境を整えたいです。

みいらく寺子屋実行委員会（長崎県五島市）

島の人と自然を生かし、子どもが混ざって学ぶ活動をしています。高校生が小学生に教える学習教室も続いています。今年度は活動を増やし、海や手仕事を通じた体験を広げます。

学生団体のらねこ（鹿児島県西之表市）

島を離れた学生も、外から地域に関われる場をつくっています。帰省した学生が高齢者に聞き取りを行う計画です。本にはない島の大切な記憶を、冊子として残したいです。

NPO法人くにたち農園の会（東京都国立市）

藍染めを軸に、農と手仕事、子どもの学びをつなぎたいです。今は土間の整備を進めています。建物の外に開くことで、近所の方が立ち寄り、声をかけてくださる交流も始まりました。

一般社団法人清水沢プロジェクト（北海道夕張市）

炭鉱のまちの記憶を集め、伝える活動をしています。地域の内と外の人が尊重し合う関係を大切にしています。助成は若い人の参加や、地域の資源を生かす取組に使っていきます。

小須戸ARTプロジェクト実行委員会（新潟県新潟市）

空いた町家をアートで開き、地域の内外をつないでいます。今年度はアーティストの滞在拠点の空調や水回りを整えます。作品展示や手仕事の市を、町家に入るきっかけにしたいです。

だんだん良くなる宝'引荘（富山県南砺市）

茅場の作業や学生との話し合いを進めています。一方、片付けの遅れと、学生が通う交通手段の確保が課題です。ものづくりの部屋や図書室を整え、地域内外を結ぶ拠点にしたいです。

大道田まちづくり支援の会（広島県呉市）

災害をきっかけに、山や排水路を地域で手入れしてきました。花を育て、子どもも訪れる広場にしています。今回の助成では排水路の蓋を整え、維持管理の負担を減らします。



懇親会の様子

